

■毎年進化し続ける寄居北條まつり



寄居北條まつりは、鉢形城三鱗会や寄居町、寄居町商工会、町内金融機関などで構成する「寄居北條まつり実行委員会」が運営しています。新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2、3年は中止となりましたが、令和4年は、規模を縮小して11月に延期開催し、令和5年は、5月中旬に戻し、規模を縮小して開催。令和6年の開催では、第63回を迎え、大勢の観客が来場しました。昨年の開催内容を振り返ると、お祭りは、武者隊パレードから始まりました。総勢約500人もの甲冑を身に纏った武者が駅前中央通り線に集結。参加団体は、町内企業や団体のほか、町内小学校の3、4年生が参加する子ども忍者隊、町内中学校の剣道部員が構成する剣道連盟1・2番隊、ほかに、北条氏ゆかりの地の小田原市や八王子市、沼田市、所沢市、上田市、ときがわ町など20団体を超えました。勇壮な武者が隊列を組み、市街地を練り歩きながら玉淀河原まで着くと、信号雷の合図とともにセレモニーが開催され、舞台ステージでは、武士が出陣する際の儀式で総大将が「打ちあわび、勝ち栗、昆布」の3品と酒を飲み干し、必勝を祈願する三献の儀が行われました。その後、見どころである、攻防戦や一騎打ちの開始。白煙が立ち上る中、太鼓の音や爆竹、大砲の轟音が地を這って響き渡りました。豊臣軍と北条軍に分か

れた参加団体が、指揮官や講談師によるナレーションの合図とともに幾度となく攻防戦を繰り広げました。武將同士の一騎打ちも迫力満点。両軍は一進一退の攻防を繰り広げ、盛り上がりが高潮に達した後、鉢形城の開城ナレーションとともにお祭りは終了となります。お祭り全体の中で北原さんに一番うれしかったことは何かと尋ねると「事故やケガもなく、無事終わったときです」と笑顔で語ってくれました。



ドコースなど、数々の変化を遂げてきた現在の寄居北條まつりの在り方について「毎年同じことをやることは簡単。同じものだとつまらないです。見に来る方が飽きないように、毎年1つや2つ工夫しています」と語ります。実際、昨年は本祭に先立ち、前日の5月11日に「鉢形城跡北条氏邦公入陣行列」を開催。入陣行列が市街地を練り歩き、本祭に向けて町内を盛り上げました。「寄居北條まつりは、神社やお寺など神事が絡むイベントとは違い、任意の団体が始めたイベントなので主催者がしっかり継続していかないとけません。これまで63年もの歴史があるが、まだまだ、みなさんにとって当たり前の祭りになっていません」

現状のものに満足せず、観客に飽きさせない工夫と、進化し続けることの楽しさを追求し続ける北原さん。このモチベーションこそが、さまざまな企画を積極的に実施する鉢形城三鱗会の原動力になっているのではないかと思います。「続けられるだけ、精一杯、頑張りますよ」と力強く答えてくれました。

■他市町村と幅広く交流

鉢形城三鱗会は、一年を通してほかの自治体のお祭りやイベントに参加していると語ります。3月の津久井城まつり（相模原市）の参加から始まり、5月小田原北條五代祭り（小田原市）、滝の城まつり（所沢市）、8月八王子氏照祭り（八王子市）、10月上州沼田真田まつり（沼田市）、北条氏照まつり（八王子市）、11月嵐山まつり（嵐山町）、八王子いちよう祭り（八王子市）など、数多くのお祭りへ出向き「寄居町にある鉢形城のPRを行うほか、甲冑を着用して火縄銃の演武や居合切りの披露を行い、他団体と親睦を深めるなど、交流を行っています」と、広く活動しています。火縄銃や大砲などの火薬を使用する際は、当然のこと、日本煙火協会の資格を有した会員が取り扱っており、よりよいパフォーマンスのため、定期的な射撃場での練習も欠かせません。また、居合切りにおいては、本物の日本刀、いわゆる「真剣」を使用し、巻き藁を3度にわたって切りつけます。スパッと切り落とされるシーンは、切れ味が鋭い日本刀を感じることができます。

■駅前イベントの実施

町では、中心市街地の賑わい創出につながるイベント等の取り組みに対し、1団体につき、最大20万円を補助する「寄居町中心市街地賑わい創出事業補助金」を実施しています。これまで多くの団体に活用されてきましたが、鉢形城三鱗会もその補助金を活用した団体の一つです。令和5年9月から令和6年3月に計6回実施した「駅前フリマ」では、賑わい創出交流広場YORIBAにおいて、甲冑を着た武者によるにぎやかしや新鮮野菜、惣菜パン、古着などを出品し、多くの人で賑わいました。また、令和6年6月と9月に、甲冑を着て町内を散策する「古城の町よりい甲冑ウォーク」を開催。参加者を募集し、甲冑を着ながら正龍寺や鉢形城公園などを練り歩くなどして、歴史に思いを馳せました。ほかにも、令和6年12月には「参式六五市甲冑とちつき」を実施し、甲冑武者とのじゃんけん大会やもち、骨董品の販売が行われました。このように、お祭りに携わるだけでなく、さまざまなイベントを企画し、実施する北原さん。「お祭りを行っていない時期にイベントを開催することで、鉢形城三鱗会をもっと知ってもらいたいです。やることに意味があるんです」と熱い想いを語ります。



関東屈指の名城 | 鉢形城

荒川と深沢川に囲まれた断崖に位置する「鉢形城」は、文明8年(1476)、山内上杉氏の家臣であった長尾景春が築城したと伝えられています。その後、北条家の3代・北条氏康の5男として生まれた北条氏邦が、当時の武蔵の豪族・藤田氏の婿養子として迎えられ、この地を治めることとなりました。氏邦は、藤田氏から譲り受けた地と鉢形城を関東支配の重要な拠点としてとらえ、大幅に拡充し、その後、群馬県南部まで勢力を拡大したといわれています。また、真田昌幸との争いの地点であった名胡桃城の城主に偽りの書状を送り、その際に落城させるなど、策略家としての一面もありました。

ところが、豊臣秀吉による天下統一が進む天正18年(1590)、名胡桃城の事件を機に、前田利家・上杉景勝らが率いる豊臣方の大軍勢が、鉢形城を目指して進軍しました。迎え撃つ氏邦を筆頭とした鉢形衆の兵力はわずか3,500人。その中には、百姓や町民まで含まれていたといわれています。しかしながら、北条軍の戦意は高く、自然の要害を活かした鉢形城は容易に落城しなかったため、業を煮やした豊臣秀吉は、度々増援を向かわせ、豊臣軍は総勢約50,000人余りに達することとなりました。北条軍はわずかな兵力で奮戦し、戦は1カ月余りに及びましたが、城兵の命を守ることを条件に、開城することとなりました。

鉢形城は、平成18年に「日本100名城」に選定され、現在では、鉢形城公園として、四脚門や堀、土塁などが整備されています。



所の周辺を見回すと、今年の祭りで必要な道具の準備が着々と進められており、開催に向けた士気が高まっているのを感じました。第64回寄居北條まつりに向け、甲冑武者の勇ましい足音が聞こえてきます。



北条氏の家紋